「障害のある人の表現と伝統工芸の発展と仕事づくり」
2021年度活動報告

主催：一般財団法人たんぽぽの家　助成：日本財団「障害のある人の表現と伝統工芸の発展と仕事づくり」

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Photo:Kiyoshi Nishioka

本事業の目的

伝統工芸分野における障害のある人の仕事づくりを進めることにより、生まれてくる作品・工芸品、ならびにその背景となる地域の文化や障害のある人の表現を国内外に発信する。伝統工芸にかかわる職人や工房、メーカー、ギャラリー等と協働して継続的にワークショップや展覧会、議論の場を設け、各地域に根ざした発信、生活への提案を行う。最終的に本事業の理念を実践し、その意義を日常的に伝える拠点をつくることで、障害のある人の新たな社会参画を進め、所得の向上に寄与する。

事業内容

1. レジデンス（技術交流）

時期：2021年9月～2021年2月
場所：奈良県奈良市、奈良県香芝市、京都府長岡京市
内容：障害のある人と作家が互いの施設や工房等に滞在しながら、共同して作品や製品を制作した。「竹工芸」「木工」「射出成形」の3組の異なる素材や工法での制作を実施。それぞれの活動についてwebサイトで逐次報告し、展覧会にて成果を展示、トークセッションで成果を共有した。

2. 展覧会およびトーク

時期：2022年3月20日（日）、27日（日）
場所：Fab Café KYOTO
内容：レジデンスによってうまれた作品や製品を展示する機会をつくった、また、トークを実施することにより、障害のある人と作家の交流の様子や、ものが生まれた背景なども伝えることによって、本事業の価値をより多くの人に紹介した。

3. リサーチ（調査交流）

時期：2021年9月～2021年2月
場所：奈良県奈良市、京都府長岡京市
内容：障害のある人と作家が互いの施設や工房等に滞在しながら、共同して作品や製品を制作した。「竹工芸」「木工」「射出成形」の3組の異なる素材や工法での制作を実施。それぞれの活動についてwebサイトで逐次報告し、展覧会にて成果を展示、トークセッションで成果を共有した。

4. ウェブサイトでの掲載と発信

内容：ウェブサイトやSNSを通じて、本事業での取り組みや議論、成果を掲載した。
言語：海外の関心ある人がアクセスできるよう、英文ページを作成した。

レジデンス（技術交流）

工芸と福祉の分野をこえて制作技術や環境／素材／人材を交え、障害のある人が参加・試行することで生まれるプロセスや価値を発見する。

木工ws（全3回）

ファシリテーター：酒井義夫（ろくろ舎）

・技術の鍛錬や研鑽、機械加工とは違った木工の加工手段を探る

・地元奈良にある資源や人材でものづくりの生態系をつくる

竹工芸ws（全3回）

ファシリテーター：高野竹工株式会社

・竹の生育から材料の生成、素材特性や加工方法の体験

・福祉と結びつきの少ない素材から、つくり手とともに用途を見出す

射出成形ws（全2回）

ファシリテーター：松本恵里佳＆新工芸舎

・デジタルファブリケーションを活用した工芸に取り組むなかで、素材を生み出すプロセスや素材を使うサイクルを増やす／延ばすことからものづくりを考える

木工との交流

講師：酒井義夫（木地師／福井）
第１回　2021年9月25日（土）
レクチャー：ろくろ舎の仕事／漆器の制作工程を知る
制作：打刻／浮造りの実験

第２回　2021年11月12日（金）
制作：打刻／浮造りの体験プログラム

第３回　2022年1月8日（土）
制作：打刻／研磨仕上げ／3DP石器

福井県で活動するろくろ舎の木地師・酒井義夫さんをファシリテーターにむかえ、木工について学び、試行するための創作ワークショップを実施した。奈良県内で材木に関わる仕事や、さまざまな手法で木をいかし創作している作家や工房を見学し、障害のある人との木工の可能性について意見交換を行った。漆、三宝、木工ろくろ、浮造りなどの伝統技法や、量販店では見ることが難しい国内外の多種多様な木材などを見聞きし、漆の木の植樹を体験するなど、木や森の生態系や材木のいかし方を学んだ。曽爾村で行ったワークショップでは、木材の余材に打刻してテクスチャーをつけ、切る・彫る・削るとは違った創作にアプローチ。最終的には「石器」をイメージした道具を開発をした。

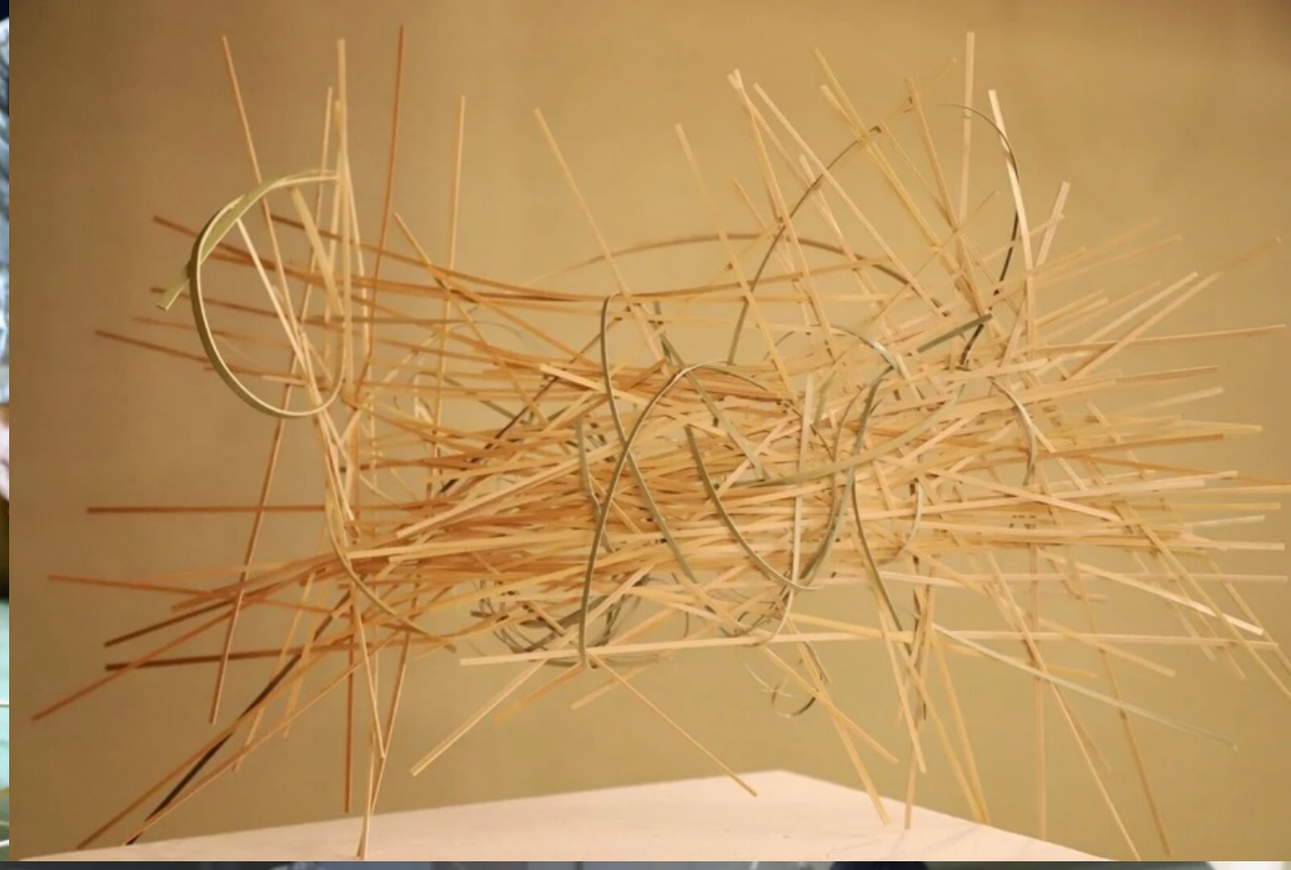
竹工芸との交流

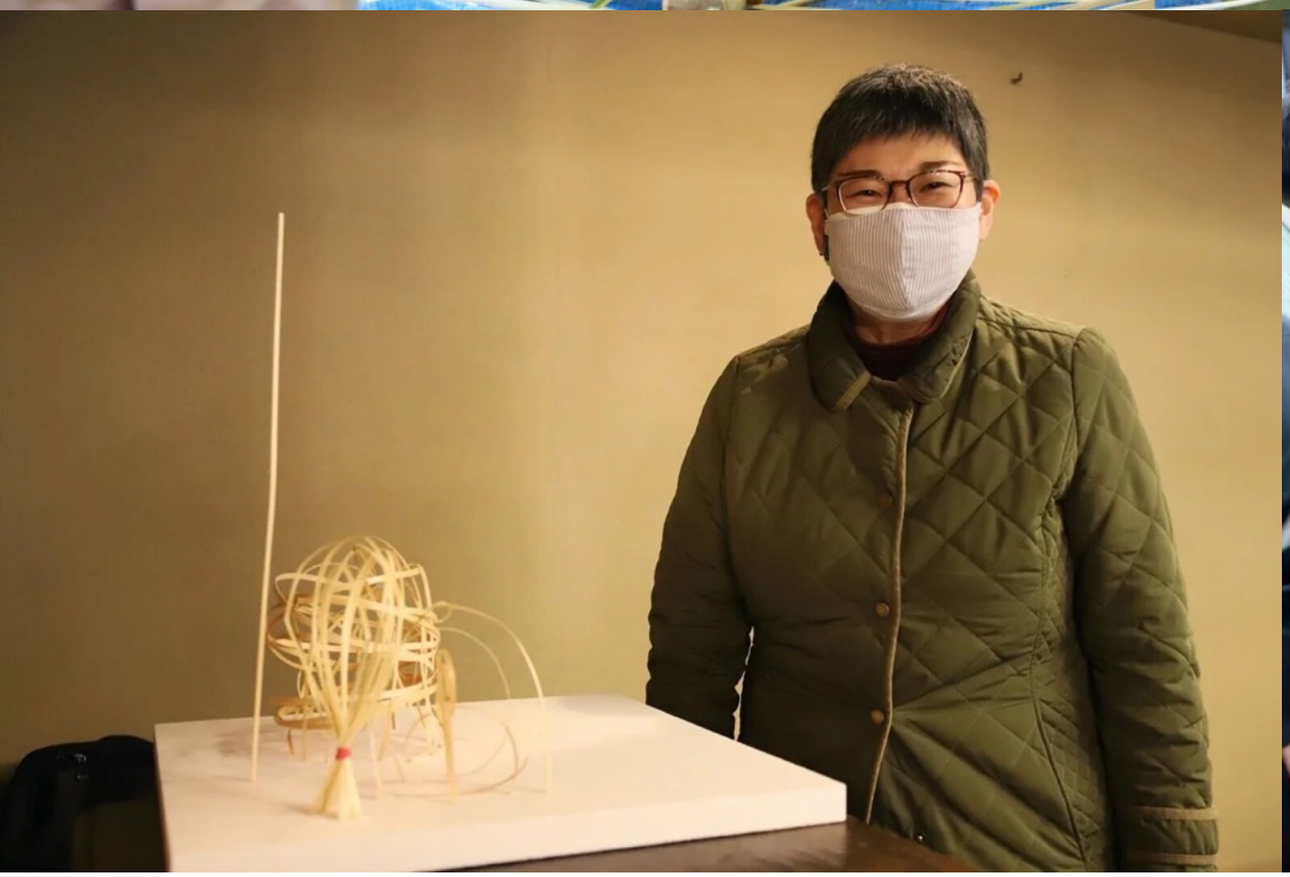
講師：高野竹工株式会社
第１回　2021年10月26日（ 火）
レクチャー：竹の生態や素材を知る。
制作：竹と異素材を組み合わせたモビールづくり

第２回　 2021年12月21日（火）
制作：基本の竹編を体験する／自由に編んでみる。

第３回　2022年2月25日（火）
レクチャー：高野竹工のものづくりを知る。
制作：ブローチなどのアクセサリー作り

竹の産地としても有名な長岡京で長年竹工芸に携わる高野竹工株式会社と、京都の障害のある人たちとともに竹のものづくりの可能性を探った。竹の生態から素材にするまでの過程を学び、また基本の作り方を体験しながらも自由に作る余地を残しながらものづくりワークショップを実施した。
最終回は、漆や金箔などの技法と組み合わせながら竹のブローチをつくり、生活を彩るものづくりについて語り合った。



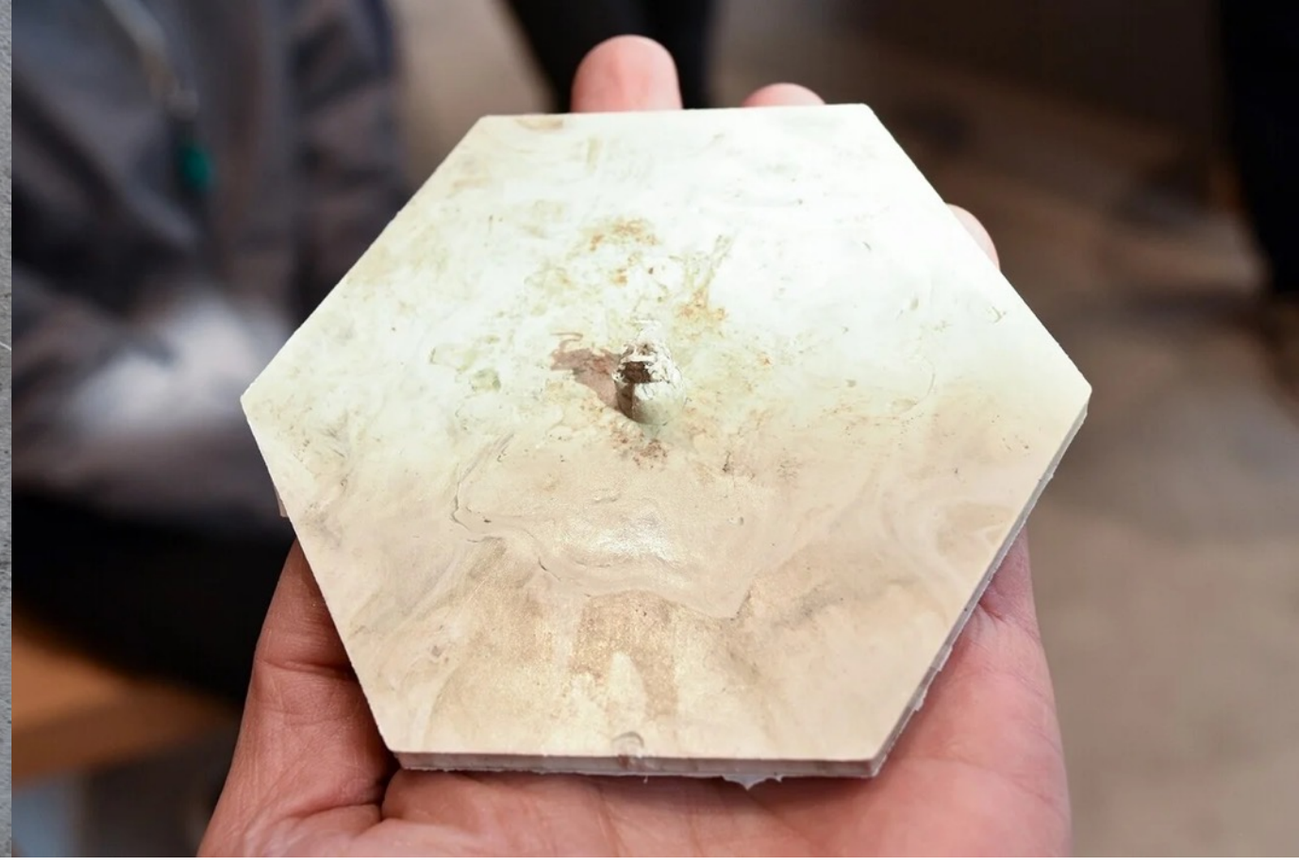


デジタル工作技術の交流

講師：新工芸舎、松本恵里佳
第１回　2022年2月2日（水）
レクチャー：3Dプリンタで生み出す新工芸を知る
制作：射出成形機をでのプラスティック再生

第２回　2022年2月24日（木）
制作：身近な道具をつかってアップサイクルの
　　ものづくりをする

新しい技術と組み合わせながら工芸を更新していく取り組みを学ぶ機会をつくった。
3Dプリンタをつかって、新しい価値を生み出す「新工芸舎」、プラスティックのアップサイクルに取り組む松本恵里佳さんをお招きし、コンパクトな射出成形の技術をつかって、自分たちでプラスティック、廃材を再度素材に作り直すというプロセスを体験した。どろどろになったプラスティックを再び型に入れて物を作ったり、ホットプレートなど身近な道具を工夫してものづくりの試行した。参加者のなかからは伝統工芸のなかにアップサイクル、循環という概念も必要だという意見が出るなど、福祉の現場に生かせるような考え方を共有することができた。



展覧会「福祉と伝統のものづくりから考える、人・もの・地域の新しい関係」

日時：3月20日（日）、27日（日）

会場：Fab Café Kkyoto　オンライン配信

来場・視聴者：156人

これまでの活動を紹介する展示を京都で実施した。
新型コロナウィルスの影響もあったが、トークと
同時開催することで、現地に来れない人たちにも
展示を伝えることができた。

トーク「福祉と伝統のものづくりから考える、人・もの・地域の新しい関係」

日時：3月20日（日）14：00〜16：30

会場：Fab Café Kkyoto　オンライン配信

参加・視聴者：156人

ゲストスピーカー：新工芸舎、松本恵里佳、矢津吉隆（美術家、kumagusuku）、神尾涼太（Re:public）

DAY1 「ものづくりにおける循環、再生」

これからのものづくりを考える上で、欠かすことのできない環境負荷削減や 廃材利用また、素材へのアプローチ方法といったテーマにについて考えた。共生/再生の視点を取り入れることで、福祉現場でものづくりや表現活動はどのように変わることができるか、議論した。トークゲストからは、大量生産、大量消費に対する疑問と創造的な解決方法としてのものづくりについて事例報告があり、プラスティックの再生活動や、アーティストの工房で廃棄されるものの再活用や、さまざまなジャンルや世代が集まり、持続可能な地域づくりをしている事例などを共有。循環や再生をとおして、環境課題を解決するとともに、より価値の高いものづくりや関係性を築く可能性について話し合った。

トーク「福祉と伝統のものづくりから考える、人・もの・地域の新しい関係」

日時：3月27日（日）14：00～16：30

会場：Fab Café Kkyoto　オンライン配信

参加・視聴者：98人

ゲストスピーカー：酒井義夫（ろくろ舎）、井上 愛(motif)、井澤葉子(高野竹工）、浅野 翔（ありまつ中心家守会社）上記ほか、藤井克英（Goodjob! Center 香芝）

DAY２ 「福祉×伝統工芸　ものづくりの交流を通した学び」

これまで実施してきた伝統工芸と地域・生活の関わりを考えるスタディツア ー やものづくりの現場と交流するレジデンスプログラムを通して見えてきた視点を参加者とともに共有した。

各登壇者からは、レジデンスの意義と、障害のある人とものづくりをする上で感じた可能性を発言があり、今後より価値のたかいものづくりや、実験で終わらず販売までを目指した製品開発について議論した。また、愛知からのゲスト2人からは、ものづくりツアーで産地をめぐることで、その後も地域で地場産業をいかした事業を展開している福祉施設の事例などを共有した。

リサーチツアー（調査交流）

奈良編「奈良のものづくりの産地をめぐる」

①漆芸作家漆の木のある森づくり

日程：2021年9月25日（土）、26日（日）

訪問先：坂本修　漆工房／山と漆プロジェクト

②奈良の木工作家・工房／伝統工芸の取り組み

日程： 2021年11月12日（金）、13日（土）訪問先：徳田銘木／吉谷木工所／アップル・ジャック／漆の木の植樹体験

③木材の生産現場・樹種の見学

日程： 2022年1月8日（土）

訪問先：徳田銘木

内容：レジデンスで木工の取り組みを行ったろくろ舎の酒井義夫氏とともに、奈良県の漆の産地や木材生産の現場を巡った。

奈良市内で漆工芸作家として活動する坂本修氏からは、障害のある人も環境とサポートがあれば、ハードルを下げて漆工芸に取り組めるといったアドバイスをいただいたり、漆塗りの発祥の地といわれる曽爾村では、材料となる漆の植樹から体験をすることができた。また、県南部で活動する木材の生産業者を巡った。特に徳田銘木からは、レジデンスで使用する材木の協力をいただくなど、今後も継続した交流が期待できる。

京都編 「 北山杉の里から、ものづくりを考える 」

日程： 2021年12月16日(木)

訪問先:京都府京都市北区中川北山町エリア 案内人:本間智希(北山舎)

内容：世界的にも珍しい、産地で製材までをおこなう北山杉。狭い地形を活かした育成法を開発し、長年地域の産業を担ってきたが、現在は林業に携わる人や、需要自体が伸び悩んでいる。今回のツアーは、建築史家でもあり北山を拠点にあたらしいまちづくりを主導している本間さんのご案内により、異業種の参入によって新しい地域の魅力を発信しようという取り組みを拝見した。地域の人たちの誇りを大切にしながら、新しいものづくりや活動のヒントになる出会いとなった。

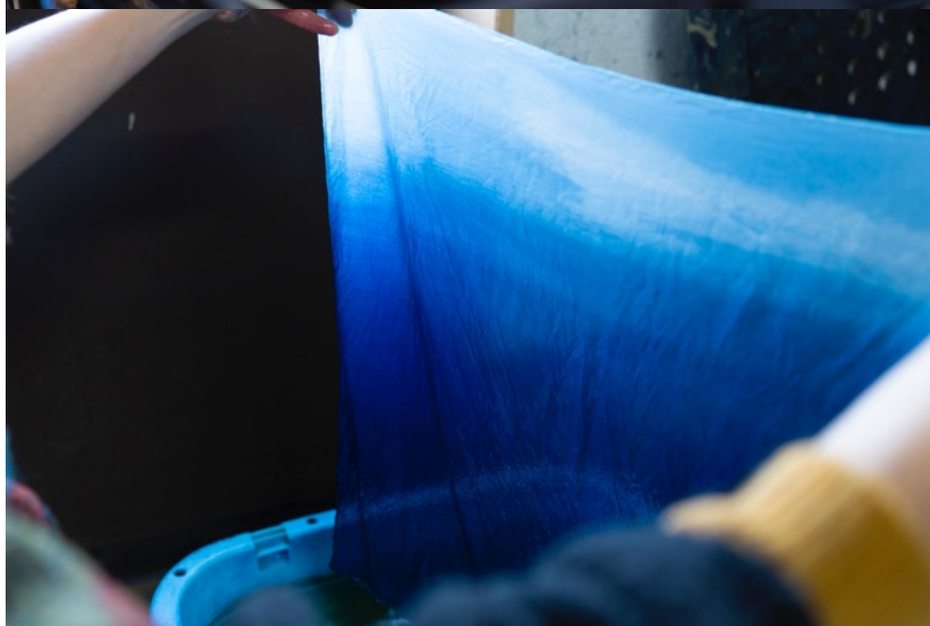
徳島編 「 徳島の伝統工芸と福祉の可能性を探る旅 」

日程： 2021年 12月 18日(土)、19日(日)

訪問先 : 富永ジョイナー（木工)、上勝町ゼロ・ウェイストセンター、カフェ・ポールスター、アワガミファクトリー/阿波和紙伝統産業会館、WEEKEND TAKAHASHI STORE、武知家住宅(藍染)、Saai dye studio(藍染)

案内人 : 高橋利明(建築家/WEEKEND TAKAHASHI STORE)

内容 : 2日間にわたり、徳島県の伝統工芸の工房や産地を巡った。阿波指物や阿波紙、阿波藍など、昔から阿波の特産品として取り組まれる産地だけでなく、上勝町のゼロウェイスト・センターなど、ものづくりの後にある、廃棄や循環といったテーマにも注目した。案内人の高橋利明氏は建築家であるとともに、地域の文化の伝え手として活動をしており、ものをつくり、伝え、使った後のことまでをひとつのサイクルとして考えることの大事さを学ぶことができた。



山形編

「 山形の伝統工芸と福祉の可能性を探る旅 」

日程： 2022年1月15日(土)、16日(日)

訪問先:吉勝製作所、新庄市エコロジーガーデン『原蚕の杜』、
おやさいcafé AOMUSHI

ファシリテーター：吉田勝信、吉野敏充

案内人：武田和恵(ギャラリーら・ら・ら/ しおむすびおかわり)

内容：山形では2つのエリアで、地域で活動するデザイナーとものづくりの可能性について、自然の中で素材を採取しものづくりに生かす技術を学んだ。2日目は山葡萄の皮を使った箸止めづくりに挑戦した。後半はデザイナーやや地元の福祉施設職員の方を交えて、意見交換の時間に。福祉施設での表現活動における悩みごとや今後の可能性を話し合った。

生まれた土地にもともとあるものの価値を見直し、現代に軽やかさや楽しさをもって伝えていくその姿勢から学ぶことができた。

販売サイトの運営

販売サイト「障害のある人の表現とものづくり」

販売サイトを運営することで、商品の購入につながったり、商品ページがそのまま活動の広報になる場面もあった。
また、英文併記をすることで、海外発信をすることができた。

成果と課題

本事業の実施によって、障害のある人が伝統工芸や地域のものづくりに参加する機会が増え、新しい仕事につなげるきっかけをつくることができた。いっぽうで、各地の工房や職人たちにとっても、本事業によって新たな出会いや発見があった。たとえば木工では、特別な道具を使わず、「叩く」という行為で木肌に表情をつけ、製品価値を高めるなど、障害がある人たちと取り組むからそこの新しい工夫や発見があった。現時点では実験的な取り組みだが、今後継続実施することで、応用可能な技術であり、製品化も視野に入れた取り組みが可能である。

リサーチに関しては、当初計画していた訪問先を上回るエリアに行くことができた。新型コロナウィルスに配慮しながら、現地での同行者を募り、工房や福祉施設で実態調査をおこなうことができた。また、ウェブサイト上で随時報告することにより、本事業に対する関心を高めることができた。
リサーチとトークについて共通しているのが、伝統工芸のものづくりだけではなく、リサイクルや持続可能な地域づくりといった、ものづくりをめぐる環境についても関心をもって取り組むことだった。ものをつくることが目的ではなく、ものをつくることで人と関わり、関わることで人や地域が幸せになることが本事業の大きな目標であることを実感した。

今回の事業で実感したのは、各地域にいるコーディネーターとなる人たちの存在の大きさだ。その地域に根をはりデザイナーやプロデューサーとして活躍をしている人たちがいるからこそ、本事業で目指す福祉とものづくり分野の交流が可能になる。今後各地域に、分野を横断するコーディネーターと出会う機会を増やしていくことが大切である。

課題として残るのは、製品化して販売実績をつくることや、地域のものづくりを継承するような具体的な取り組みがまだ実現していないことだ。拠点づくりにむけて、実際に各地で実験したものを製品化し販売していくことがこれらの対応策となる。特に、販売時に付加価値をつけて売ることができるか、売り先としてしっかりと価値や意義を伝えていく「伝え手」とより深く関わることが今後の課題として残っている。